

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2009

課題番号：20720038

研究課題名（和文）劇団「心座」（1925～1930）の上演研究

研究課題名（英文）Production Research of Kokoroza(1925-1930)

研究代表者

正木 喜勝 (MASAKI YOSHIKATSU)

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：80456938

研究成果の概要（和文）：本研究では、1925年から1930年まで東京で活動した劇団「心座」の実態を、「上演」という側面から考察した。具体的には、村山知義や舟橋聖一の上演作品の再構築を実証的に行い、彼らと歌舞伎俳優が近代劇という場で接触することで、いかなる問題があらわれたのかということ考察した。同時に、当該の上演が依拠する創作理念の複合性についても明らかにした。長らく等閑に付されてきた心座をこうした文脈において「再発見」したことは、これまでの近代日本演劇研究に新しい視座をもたらすものといえる。

研究成果の概要（英文）：In this study I have investigated the performances by the little theatre company “Kokoroza” (1925-30, Tokyo), including the promising ‘Shin-geki’ (Japanese modern theatre) playwright/director Murayama Tomoyoshi, his compatriot Funahashi Sei-ichi and a Kabuki actor Kawarazaki Chojuro. First I have examined the relationship between the modern theatre artists and the Kabuki actors, and secondly the interaction between the avant-garde ideas and the proletarian theatre arts on their performances. These two studies will afford some new perspectives on the ground of the Japanese modern theatre.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：演劇学、近代日本演劇史
科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：村山知義、舟橋聖一、上演分析、演劇

1. 研究開始当初の背景

従来の近代日本演劇研究は、戯曲や劇作家を主たる対象とすることが多く、「上演」そのものに焦点を当てようとするものは少なかったといえる。また、劇団「心座」についての本格的な研究も、たとえば同時代の新劇の劇団である「築地小劇場」の研究に比してみれば、ほとんど行われてこなかったといえるだろう。（心座の上演を扱ったほとんど唯一の先行研究として、原道生「歌舞伎俳優と前衛的演出—心座の河原崎長十郎と村山知義」（『ヨーロッパ演劇の変貌—ゲオルク二世からストレーレルまで』白鳳社、1994年、pp. 256-280）を挙げることができるが、これは副題のとおり村山知義の作品を主として扱ったもので、たとえば舟橋聖一の作品についてはほとんど言及されていない。）

しかしながら、そもそも「演出の確立」にこそ近代演劇の特質がある以上、上演を扱うことから近代演劇の実態の解明がはじまるはずだと研究代表者は考えた。また、心座は近代日本演劇の縮図として捉えることが可能な劇団で（心座の構成員には、第一に河原崎長十郎ら歌舞伎俳優、第二に村山知義ら「アヴァンギャルド演劇」から「プロレタリア演劇」へと「転換」する演劇人、第三に舟橋聖一らのように、こうした動向とは一線を画し「芸術派」と呼ばれた劇作家・小説家がいたが、こうしたさまざまな芸術的背景をもつメンバーが「雑居」していたことが、近代日本演劇の縮図として見なすことができる点である）、詳細な研究を行う必要があると考えた。

以上の観点から心座の本格的な研究をすすめ、近代日本演劇研究に新たな観点をもたらす必要があった。

2. 研究の目的

上述したとおり、心座の上演を分析することで、日本近代演劇史に新しい視座をもたらすことが本研究の目的である。

具体的には以下のとおりである。第一に、心座を「再発見」し、日本近代演劇史に位置づけしなおすことである。心座については、概論的なものはあるものの、本格的な研究はごく限られていた。しかし、この劇団は、当時前衛美術の領域で頭角を現しだした村山知義をはじめ、のちに「前進座」を興すことになる歌舞伎俳優の河原崎長十郎ら、舟橋聖一、池谷信三郎、今東光、今日出海といった若き作家たちが参加した、一大文芸集団であった。この集団の「再発見」を通じて、大正から昭和にかけての若い歌舞伎俳優と劇作家・演出家たちが演劇の上演という場において切り結んだ関係を明らかにするのが本研究の第一の目的である。

第二に、「上演」という側面から近代演劇を捉え直し、そこに通底する創作理念を明らかにすることである。たとえば、心座の上演には、一つの作品の中に、いわゆるアヴァンギャルド演劇的側面とプロレタリア演劇的側面が並列してみられるものもある。従来の戯曲研究あるいは劇作家研究においては相反するものと考えられていたこの両者の間、実際にはどのような相互影響があったのかについて、上演分析をとおして考察していくのが本研究の第二の目的である。

3. 研究の方法

研究方法としては、徹底した実証的手法をとった。まず、上演に関する一次資料（上演

台本、演出ノート、舞台美術プラン、舞台写真、当事者の回想録や自叙伝、新聞や雑誌に掲載された同時代の劇評、関係者のあらゆる文書など）を、早稲田大学演劇博物館、日本近代文学館、国会図書館、彦根市立図書館舟橋聖一記念文庫、民族学博物館図書室、国立劇場図書閲覧室などで収集した。

閲覧した資料の中で、とりわけ心座が発行していた刊行物をまとめた形で調査できたのは大きな成果であった。本研究の遂行に大いに役立ったのはいうまでもないが、今後の心座研究にとっても重要な資料となるであろう。

次に、これらの資料を用いて上演の再構築を試みた。上演戯曲と照らし合わせながら、収集した資料を分析し、上演の実態を明らかにしようとした。演出の意図、舞台装置に表現されている意味、俳優の演技、音響や照明の効果、観客の受容のあり方などを吟味し、それらを包括して上演の全体像を浮かびあがらせようとした。同時に、それらの上演に内在していた創作理念のあり方についても審究した。

具体的には、主として、ゲオルク・カイザー作、土方与志演出『朝から夜中で』における村山知義の舞台装置や、村山作・演出『スカートをはいたネロ』、舟橋聖一作『痲疾者』、『白い腕』、『硝子管の家』などの上演を扱った。当然ながら資料が散逸してしまったものもあり、それらに関しては、毛利三彌著『演劇の詩学- 劇上演の構造分析』（相田書房、2007年）で示された劇上演の構造モデルを手がかりに理論面からの分析を試みた。

そして、以上のように上演を再構築したのち、関連する先行研究などと照らし合わせ、従来の近代日本演劇研究の批判的検証を行った。

4. 研究成果

村山知義や舟橋聖一の上演作品の再構築を行い、歌舞伎俳優と若き作家たちが近代劇

という場所において接触することでいかなる問題があらわれたのか、ということを考えてきた。同時に、上演が依拠する創作理念がいかに複合的であったかということも明らかにした。

具体的には、村山知義の上演作品の分析からは、「アヴェンギャルド」から「プロレタリア」へという思想上の転換が、いかに上演に現れたかということをも明らかにすることができた。この成果は、論文「「転換期」村山知義の戯曲」（〔雑誌論文〕欄の②）および論文「カリカチュアの演技とその機能-トランク劇場・前衛座・心座を中心に」（〔雑誌論文〕欄の①）として発表した。

また、舟橋聖一の上演作品については、現代では心座時代の彼の活動についてほとんど等閑に付されており、一次資料を収集することからはじめる必要があった。その中で、彼の理想とした「心理劇」の特質、およびその制作背景にある岩野泡鳴の一元描写論などとの関連について考察することができた。また、同じ劇団のライバルである村山知義の芸術観に対抗する形で創作を行っていたことを、上演分析から明らかにした。この成果は、口頭発表「舟橋聖一と演劇-「心座」を中心に」（〔学会発表〕欄の①）として発表した。

長らく等閑に付されてきた心座を、このように上演に焦点を当てることで「再発見」したことは、これまでの日本近代演劇研究に新しい視座をもたらすものといえるだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 正木喜勝 「カリカチュアの演技とその機能-トランク劇場・前衛座・心座の上演を中心に」『演劇学論叢』第11号、大阪大学大学院文学研究科発行、pp. 234-247、2010、査読無

②正木喜勝『『転換期』村山知義の戯曲』『季論 21』季論 21 編集委員会、第 6 号、pp. 154-163、2009 査読無

③正木喜勝「築地小劇場『朝から夜中まで』(1924)の舞台装置再考」『近現代演劇研究』日本演劇学会分科会近現代演劇研究会発行、第 2 号、pp. 19-31、2009、査読有

[学会発表] (計 1 件)

①正木喜勝「舟橋聖一と演劇 — 「心座」時代を中心に」近現代演劇研究会京都集会、京都府立文化芸術会館、2010/3/21

6. 研究組織

(1) 研究代表者

正木 喜勝 (MASAKI YOSHIKATSU)
大阪大学・文学研究科・助教
研究者番号：80456938

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし